

## 研究ノート

# 戦前、大阪で発行された『民衆時報』に見る 在阪朝鮮人の実態 (3)

金 賛 汀

1. 地方対立と済洲島民差別
2. 逞しい海女達
3. 人身売買と売春
4. コラムに見る世相
5. この時期日本で発行されていた在日の新聞と  
発禁処分

キーワード：在日朝鮮人・在阪朝鮮人・  
1935年『民衆時報』

研究ノート(1)(2)では『民衆時報』1-5号までの紙面に掲載されている在阪朝鮮人の様々な実状について見てきた。(3)では6-7号を中心に全号の紙面を通じて共通する問題を纏めて見て行きたい。

### 1. 地方対立と済洲島民差別

#### 「我々の提唱」

〈地方的差別観念を打破しよう〉

日本国内に住んでいる同胞間において、地方差別の悪観念が潜在していることは隠れもない事実である。南道の奴、北道の奴、全羅道のしみったれ、慶尚道のライビョウ奴、済洲の奴、陸地の奴、等などお互いに誹謗、輕蔑、反目している。十人十色の個人的性格の違いまで、地方的相違点に基準を置いて総括的に善悪、優劣を規定すると云うことは土台無茶苦茶な話であ

る。その様な末に、現象として、見るに見かねる醜態すら演じている。些細な感情の縫れから地方別に対立して乱闘を演じ、外国人に嘲笑の材料を提供する不祥事をしばしば演じている。

そんなばかばかしいことの一つに、ある青年男女がお互いに結婚を願っているにも関わらず、男性の父兄が、相手の女性がただ××島（済洲島のこと）出身と云うことだけで反対しているということである。南洋の未開地の食人種ではなく、同じ民族であるのに差別する其の思考を理解するのは困難である。

多くの実例を挙げるのが目的ではないので、ここでは省略するが、無知蒙昧な悪癖を引き継いでいることは啞然自失の思いである。いわゆる有識者と云われる人の中にも、その様な癖端が見えるのには寒心に耐えない。差別的観念の発端を手繰ってみれば確固とした根拠が有ることではなく、誤った優越感の所至であり、両班、常民の封建差別の遺風である封建的思想の残滓物の一つに過ぎない。

時代と思潮を認識できず、保守的因習を固執した懐古的な志士達と同様に、先祖達の日常事であった党派間闘争、愚鈍、頑迷な当時の為政者達の排他的で鎖国政治の帰結が、どのようなものであったのか、それにより民族的破滅、離散の悲運をもたらし、より激しい民族差別の屈辱を毎日体験させられているのではないのか、

いかに神経が麻痺し、感覚が遅鈍であったといえども、この様な旧癖から脱せず、苦い過去をそのまま模倣して過ちを繰り返そうというのか？

〈我々は直ちに断末的な兄弟間の争いを中止しよう。〉

政治的圧迫、経済的貧窮などの不利な条件に囲まれて・・・云ってしまえば四面楚歌の中で我々が宗派的な分裂行動を行うことは一体誰の利益になるのか、この様な愚行が続けば我々は塗炭の苦しみから抜け出す余地もないことを忘れてはならない。

1 国境を越えて同階級の大同団結を長年に渡って訴えてきた我々は排他的差別観念を清算して、弱者である我々の唯一の武器は団結であることを再認識しよう。

1 まず、視野を広げて、末梢、末葉問題に拘泥せず、核心的で根本的な問題を把握できるように意識水準を高めよう。そして、特に地方熱の発熱源になっている親睦団体を解消ないし、せめてそれらの連合を計ろう。

以上具体的でもなく、概念的なため、得心がいかないかも知れないが不出来な提案を終わりたい。(第6号 1935年9月15日)

ここでは地方差別問題、地域間対立の問題の解消が提唱されている。在日社会では、つい最近まで地方差別が存在していたことは一世代を中心にしてであるが一隠れもない事実であり、特に済洲島民に対する差別意識は強いものがあった。これは日本にもある「離島差別」と良く似た感情で、沖縄島民に対する本州の人々の差別意識とほぼ同じような種類のものである。それは離島の閉鎖的な社会の文化、意識、風俗、習慣に対する多数派である「本土」の人々が彼らを異端視することから生まれる差別意識であろう。

かって1970年代に猪飼野の形成史を調査しているとき、済洲島出身の古老達から「陸地の奴等から何度もひどい目にあった。給料日などに陸地の奴等に捕まると、酒をおごれと脅され、拒むと『済洲の奴の頭を叩けば酒が出る』と殴られ酒代をせびられ、悔しい思いをしたことがあります」と言う類の話を良く聞かされた。

言語、風俗、文化の違和感からくる差別意識を記事が指摘するように、単純に「封建的習慣」とかたづけてしまうのは些か大雑把すぎるが、在日する同民族間での地方差別が日常生活で様々な弊害を引き起こしていたことを憂いての提案であろう。

しかし、この提案は単に一般大衆に向けての一般的な提唱と、理解するには困難な左翼運動家たちの言語が何カ所かに使われており、普遍的な意味での地方差別反対の提唱とは、違った意図も隠されているようである。例えば「宗派的分裂行動」とか「同階級の大同団結」などという言葉である。これらの言葉を使っている提唱は、1930年から1931年当時の大阪府下の朝鮮人労働運動活動家達の活動方針をめぐる路線対立と深い関係があるようである。

在日朝鮮人の労働組合運動は、朝鮮人労働者への過酷な待遇に対する、待遇改善運動として、1920年代から活発に展開された。この運動は民族差別の解消や朝鮮の独立などの要求を掲げていたため、日本人の労働組合運動とは要求が異なるということもあって、日本人の労働運動とは連帯しながらも、独自の運動を展開していた。しかし、1929年末、国際共産主義運動、国際労働組合運動の指導により、日本の革命を指向する勢力との一体化を指示され、朝鮮人労働組合総同盟は、日本の左翼系労働組合、日本労働組合全国協議会(全協)に解消されていった。其の解消の過程で活動路線をめぐる対立が生じ、

「全協」朝鮮人委員会に依拠した朝鮮人活動家達が『民衆時報』の責任者だった、金文準達を批判中傷する活動を展開した。金文準は在日朝鮮労働総同盟（労総）の全協への解消には極めて消極的であり、在日朝鮮人の民族解放闘争の放棄には反対であった。しかし、プロフィンテルン（赤色国際労働組合運動）第4回大会のテーマによる在日朝鮮人労働組合の解消理論には一樣の理解を示していたが、労総の全国代表者会議で選出された新執行部の幹部たちは「スパイ社会主義投降主義者金文準一派の正体—戦闘的大阪の労働者諸君に」などのビラを配布して、金文準たちを攻撃し金文準の指導下にあった大阪地方の朝鮮人労働運動活動家の多くが、済洲島出身者であることから、彼らに対して済洲島民に向けた差別発言を露骨に行ったことと、この記事は関連があるようである。

その様な隠された意図があったようではあるが、当時猪飼野の街では済洲島民に対する差別感情から、対立抗争が毎日のように起きていたのも事実である。

それらの記事を『民衆時報』6号は次のように報じている。

#### 料理屋で暴れ拘留 双方幣風可観

大阪市東成区南中道2-5の金種応経営の朝鮮料理屋永楽亭で旧暦の中秋のさる12日、真夜中に二人の客が酒を注文したまま店から出ていき、店では騒いでいたが、其の二人はその後、何人かの人数をつれてきて、女給、店主達を足蹴りにし、なぐり逃げ去った。女給の一人が重体になり、所轄署（東成中央署）に訴えたところ加害者である二人の客と其の連れ達が交番に引っ張られ、その後、本署に引き渡された。取り調べの結果、この騒ぎは客が店の主人に対して×××（済洲奴？）と地方差別の言葉を投げ

つけたので、店主が客に自分のバックには大きな勢力がついているかのように脅したことが騒ぎの原因という。無知蒙昧な地方差別の悪習と、暴力団のような奴等の力をひけらかした料理店店主の態度も悪く、双方に問題があると住民達は噂をしている。

同号では同様の地方差別に起因する抗争を掲載している。

#### 無頼輩ののさばりと地方差別の悪習から生じた連日の流血の残忍な乱闘

#### 猪飼野一条通りの一部地帯には現在非常警戒が敷かれる

大阪市東成区一条通りは猪飼野の最も賑わいのある大きな街路で、朝鮮女性が服地を売り、木綿や麻地を売る商店が並び、朝鮮同胞の家屋と通行人の多いこと。朝鮮の青年達の集会場のようでもあり、歓楽所のようでもある「ペリオン」という喫茶店、木村屋という大衆食堂もあって、そこでの喧嘩は絶えない。

特にそんな青年達の中でも正体不明の青年達（済洲島出身の者がほとんど）の無頼漢の群が、昼も夜も通行中の男女に言いがかりをつけ、「テロ」をなし、いつ災いが及ぶか分からないと云う悪名の高いところである。下宿と職場が其の近くの猪飼野西三丁目にある慶尚南道出身のチョン・センウォルはさる13日（1935年9月13日）午後の8時頃、自転車で「ペリオン」の前を通ったところ、通行人の少年と接触事故を起こした。その場にいた若いボクサーがそれに難癖を付けチョンを殴りつけた。チョンは自転車を下宿先に預けた後、その場に引き返して行ったが、彼を殴ったボクサーは既におらず、彼の仲間だと見られている学生服の青年一人だけが残っていた。チョンはその青年を捉え、負傷す

るほど殴りつけ、腹いせをした。

しかし、其の二日後の午後10時頃、学生服を着た青年一人が、チョンの下宿屋の門前を通り過ぎていったとき、チョンは彼も前日殴られたときの仲間だと思い、捕まえて仕返しをした。それを見ていた婦人の一人が、済洲の奴等は叩き殺してしまえと言う暴言を吐いた。丁度そこに居合わせた済洲島出身者が「地方差別をする奴は誰だ」と叫び、騒いだため10数名の者が集まってきた。その中に2日前チョンに殴られた青年もいたので「一昨日俺を殴ったのはお前だな」と陰悪な状態になっていった。状況が陰悪になったため、チョンは雇い主の金の家に逃げ込み、息をひそめていたが、青年達は「そいつを出せ」と叫びつつ「地方差別をする奴の家はここか」と集まってきて家に押し入り、ミシン、家財、窓硝子などを打ち壊した。其の屋の主人である金は、それを近くの交番に訴えた。交番の巡査は「朝鮮人の喧嘩とはまた面倒臭いことだ」と日頃おもっていることをぶつぶつとつぶやきながら乱暴に荒らされた現場を見て交番に引き返していったが、其の途中で学生服の青年二人を見つけ「お前達がやったのだろう」と其の二人を交番に引っ張って行こうとしたがその間違いに気が付いて、そのまま交番に帰っていったので、この一件は落着いたかのように見えたが、今日の朝、チョンと金は正式に交番に告発した。告発内容のなかで警察として無視できないことがらは、昨日、金の家を襲撃した者達は皆、済洲島出身者であり、又、ほとんどが拳闘クラブ員で、彼らは少年、青年、中年の三部隊に分かれていて、青年部隊は喧嘩を徴発して、中年部隊がそれを止めるふりをして多くの人を集め、その間に少年部隊は集まった人の懐を狙って、スリを働いている奴等であるという内容であった。それで、其の交番では「ベリオン」喫

茶店、木村屋食堂などの一帯に非常線を敷き警戒した。一方、金、チョン達は隣町の猪飼野西二丁目の慶尚南道出身のユン・ゴンの家に集まり、慶尚南道出身者達を100名近く集め、道路の要所要所に見張りを立てて、「ベリオン」木村屋食堂らを監視して、そこに出入りする青年達で済洲島出身者だと分かれば引っ立てて、ユン・ゴンの家に連れていき、リンチを加えるなどをした後、交番に突きだし、取り調べるなどしていたため、一日に5万人以上の人々の往来がある一条通り一帯は、道道で交通が途切れていた。ユンの家付近では見物人が手に汗を握りながら、リンチを加えられている人を見て「あれあれ可哀想に」と囁きあっていた。

今日午後8時までに判明した重傷者は済洲島出身のハン・ドリョンだけであるが、リンチを受けた者が他に二名、交番所に引っ張られ取り調べを受けている者はその他に数名になる。この事件の結末がどのようなになるのか人々は注目している。

この事件は地域対立感情から住民同士の抗争に発展した事件を報じている記事であるが、しばしばこの様な抗争が起こっていたと、かつて聞き書きを取っているとき、古老達から聞かされた。猪飼野の街以外ではこのような対立抗争は伝えられていない。日本の他の地域では済洲島出身者が圧倒的に少なく、対立勢力とならなかったからであろう。

猪飼野の街の成立については拙著『異邦人は君が代丸に乗って』（岩波新書）で詳しく記述しているのでここでは触れないが、日韓合併後済洲島からも多くの出稼ぎ労働者が日本に渡ってきたが、1922年に尼崎汽船が済洲島―大阪定期航路を開設したため、大阪は済洲人にとって最も近い日本の都市となり、其の大阪では中国

大陸向けの商品、雑貨等を製造する多数の零細工場が乱立していて、安価な労働力を求めていたという状況もあって大阪に多くの済洲人が住み着くようになっていった。

『民衆時報』が発行されていた時期、済洲島からの渡日者は全島民の25%に達していた<sup>(1)</sup>。1934年4月末済洲島から日本に出稼ぎに来ていた人数は50,053人<sup>(2)</sup>である。このうち大阪府在住者の正確な人数は統計数字としてはない。内務省警保局が調査していた在日朝鮮人の出身地域別統計では、済洲島は当時行政区分が全羅南道に区分されていたからである。1935年12月末、在大阪府の全羅南道出身者は89,256人。<sup>(3)</sup> その60-70%が済洲島出身者ではないかと推定される。そして大阪府在住の済洲島人のほとんどが猪飼野に住んで居た。

猪飼野の街は済洲島人の街でもあった。

## 2. 逞しい海女達

済洲島の地方的特徴として、海女を生業とする女性が非常に多いことである。『民衆時報』は編集人の多くが、済洲島出身者ということもあり、海女に関する記事を幾つか掲載している。それらの記事から、当時日本に出稼ぎに来ていた海女達が置かれていた状況や、思いの一端を知ることが出来る。これは現在もあまり知られていない済洲島出稼ぎ海女の貴重な記録である。

**見ろ！天人共に怒る海女ブローカーの悪行  
5カ月分の賃金全額を着服し海女達を航路  
で飢餓に追いやる。**

労働者と市民を欺き、甘い汁を吸う中間ブローカーが至る所で蠢動しており、今日社会の重大

な問題になっている。最近東京府八丈島では、何人かのブローカーが済洲島の海女出稼ぎ労働者を騙して、5カ月分の賃金を全額持ち逃げした事実がある。

去る14日東京発の列車で今日(15日)朝、大阪に着いた(22)韓梅月(23)たち海女2人により、漸くこの消息が知らされたが、其の内実は次のとおりである。

昨年春、日本各地の海採業者達は済洲島で海女出稼ぎ労働者を募集した。東京府八丈島末吉村浜の海採場を所持している有馬、川端の二人は金珍圭、金正圭、金在春、韓順澤等5人を主募者として、彼らが住んでいる東金寧里、月汀里などの村々から同郷の人間関係を利用して海女の募集に成功した。海女達は彼らの引率の下、去る3月、前記の海採場に到着して懸命に働いた。主募者達は働く期間が終わり、帰国する日に賃金は一括して払うことと契約しているので、その様に承知して欲しい。と説明した。

しかし、金珍圭たち主募者達は仕事に就く3月に前借りの形式で5カ月分の賃金の全額を雇い主から既に受け取っていたのである。そんなこととは知らない海女達は、主募者の言葉を信じて働き、期間が終了した後、賃金の全額を払うように要求した。然るに主募者は支払わないだけでなく、其の説明が要を得ないので、直接雇用主に尋ねた結果、既に支払っているという。そして雇用主は従業員期間が終わったと、島から立ち去ってしまった。

残された海女達は主募者たちに激しく講義したが、埒があかず、毎日が騒ぎであった。末吉村村長は雇用主である村民に対する責任から、去る11日、海女と主募者を連れて東京に出て、某旅館に宿泊して雇用主に会おうとしたが、彼

(1) 榎他一二「済洲島人の内地出稼ぎについて」1934年、大塚地理学会論文集第5輯

(2) 同上

(3) 内務省警保局「内地在留朝鮮人出身調査」、昭和10年



らにも会えず、その間に金珍圭たちが逃げてしまい、海女達は旅館の宿泊費もなくなり進退窮まった。しかたなく海女達は借金をして飢えを凌ぎ、問題解決への社会の支援を期待しているが、前記、金氏、韓氏の二人の海女は幸いにも多少の所持金があったので、この事実を社会に知らせるべく先にその場から出発してきたという。

ここで云う主募者とは、海女の引率と監督を兼ねて同行して来る者で、たいていの場合海女の夫が其の役を引き受けることが多い。この記事では海女の人数について触れていないが、5人の主募者がいたということであるから、其の海採場で働いていた海女の数50人から60人に達していたと思われる。

関連した海女関係の記事に出稼ぎ海女の仕事の終了と帰国に関する記事も掲載されている。

#### 出稼ぎ期間が過ぎ海女達続々と帰国。

##### 途中に大阪を通過

暖かい春、暑い夏は海採の季節であり、全朝鮮の海岸はもちろんのこと、東は日本の各地の海岸、西は渤海湾の各地まで行かないところがない済洲島の海女出稼ぎ労働者は、最近各種水産業、その中でも海草養殖業が日ごとに発展する日本各地の企業家に、季節雇用の条件で雇われ毎年渡航する人々が増大している。今年は海草の価格が高かったため、多くの海女達が雇われたが、海女達は人間社会の欺瞞、搾取、そして大自然の危険と対陣しながら毎日を勇敢に立ち向かい、最近出稼ぎ期間が終わったので全員出稼ぎ地を離れ、大阪を経て続々と帰国する途中である。今期も（15日）四国地方の愛媛県日振島という出稼ぎ地から、海女達は主募者韓成周引率の下、大阪商船の〇〇丸で大阪築港天保

山埠頭に到着。上陸した後海女達は大阪市内の知人や親戚を訪ねていった。

前述したように済洲島出身者の日本への往来は大阪―済洲島航路の定期船を利用する人々がほとんどで大阪によれば島出身の親戚知人を訪ねるのを慣行としていた。

このような報道記事と共に6号、7号と連載で海女の「遠征海女軍の職業戦線譜」と言う表題で手記を掲載している。手記は次のとおりである。

#### 遠征海女軍の職業戦線譜

この文は「私たちは済洲島の海女です」と言う題目で、ある海女労働者から本社編集部に送られてきた手記であるが、其の内容に従い題目を前記のように改めた。女性が堂々とはあるが、細々と其の地方独特の方言で、たどたどしい文章で苦心しながら書いた物であるので、原文を読み下すのに3時間もかかった。その様な手記は一般読者には理解できる物ではない。しかしながら、筆者の心と努力に応えるためにも、また、女性から送られてきた原稿を尊重し、更に、海女労働者の日常生活がどのようなものであるのかを読者に知らせようと云う意図の下、一般に理解できない地方方言を標準語に直し、ここに掲載することにする。

私たち海女は生きるために毎年春になれば、海採の仕事に就きます。今年も海採のため遠くにある海採場までやって来ました。この場所に済洲島の海女が入るのは昭和6年からで、それ以降5年、毎年ここに来て海女達は苦しい海採労働に従事してきました。雇い主は自分たちの利益だけを追究して、海女達には実績収獲の4分の1も分けて与えてくれません。しかし、なにも知らない哀れな海女達は決め事がそんなも

のなのかと思い、なんの文句も言わず、この間仕事に従事してきました。

今年も前と同じように仕事をしていましたが、人々の話から今年は世界的にテングサの価格が値上がりしていることを知りました。なにも知らない海女達にとっても、それは嬉しい話です。苦勞して、疲れた体に鞭打ってテングサを少しでも多く海底から削り取れるよう働きました。

しかし、定めに抛れば（注 出来高払いの契約のようである）30銭をくれても相当なものなのに自分たちの利益を確保し、私たちには唯の10銭しかくれません。これに憤激した海女達はすぐに仕事を止めて銭主（注 雇い主のようである）の所に行きました。丁度、採州島海女駐在員（新聞には注として〈済洲島海女組合特派員〉とある）も出張していた時のことです。なにも知らない私たち海女は、訴えるところがなかったので駐在員に訴えました。駐在員は事務所に出向き、銭主と交渉していましたが、私たちに15日間待てと言うのです。しかし、噂に抛れば駐在員はすぐに帰国するとのことだったので、駐在員が帰国する前に、問題を解決しなければならぬと考え「あなたがここに来たのは私たち海女を助けるためでしょう。だからあなたが帰国する前にこの問題を解決してください」と50余名の私たち海女は一斉に声をあげて訴えますと、駐在員はおびえたような声で云うには「15日後に解決していなければ私の名刺を置いておくから、済洲島に知らせてくれれば、いつでも解決することができる」と言います。しかし私たちは「嘘だ。逃げようとしているんだ」と言い反対しました。しかし駐在員は危害を加えられるとも思ったのか早々と船に乗って立ち去ってしまいました。それならばと私たちは15日間休業する事にしました。すると今度

は銭主と引率者が休業はしないでくれと頼み込んできました。それで仕事は続けることになりましたが、15日が過ぎててもなんの返事もなかったのですが、去る6月2日夜、50人の海女達は呼び出されました。おかしいなと思いながら行ってみますと、銭主の書記が出てきて云うことには、今年は諸物価も高くなっているので10銭の所を11銭にしたので、今後も精いっぱい働いて海産物を取ってくれと云います。其れを聞いて私たちは腹が立ちましたが、穏やかに1銭を上げてくれるのは有り難いことだが、しかし、あなた方は私たち海女を何だと思っているのですか（以下7号）幼い子どもでもないのに、1銭で宥めようとしているのか、其れほどまで私たちを馬鹿にしているのか。私たちは其の賃金では仕事をしない。やれるのならあなた達でやっでご覧なさい。

そしたら、彼らは「それでは仕事をしないで帰国するのか」と言います。そうだと答えると「そうかね。それでは仕事をしないで帰るのは誰と誰なのだ」と聞きます。私たち全員が強い調子で「帰る」と答えました。そうすると彼らは「そんなに帰ると云いながら、仕事を続けるようになるとどうするつもりだ」と馬鹿にしたような態度で詰問した後「どうであれ仕事をしろ」といって事務所に入ってしまった。

それからストライキが始まりました。

監督者は××村役場に報告しました。役場では私たちを呼びだしストライキになった経緯を聞きました。私たちは私たちの要求や雇い主の今までの待遇などを順を追って細かく話したのですが、役場ではもめ事になり不機嫌になり「我々の見るところお前たちが堪え忍ぶべきなのに騒ぎ過ぎなのではないのか」と怒鳴ります。海女達は腹が立ってたまらず、私たちをここに連れてきた引率者を呼んで「今まで働いた賃金

を支払ってくれ、我々は故郷に帰る」と言いましたが何の返事もしません。私たちは一層腹が立ち引率者の×××の胸ぐらをつかみ50人の海女が騒いでいるとき、役場の人が彼らを連れていってしまいました。その後、私たちは事務所の前に行き、悔し涙を流しながら私たちは故郷に帰る、引率者は出てこいと騒ぎましたが何の返事もなく、静まり返っていました。その内、引率者の一人が出てきて小さな声で「10分待ってくれ」と言います。私たちは「待てない、勘定を払ってくれ、国に帰るから」と大声で答えました。

彼らが役場に知らせたので村長、村会議員、巡査たちがやって来て、威圧を加えながら「どうしてこんな紛争を起こすのだ」と威張りながら聞きます。それで私たちは冷静に事情を話し私たちの要求を伝えました。しかし引率者は「お前たちの要求は聞き入れられない。我々の利益がないのだから」と言うのみです。そこで私たちは「勘定をしてくれ。私たちを故郷に帰してくれ」と言うのと何の返事もしません。私たちの怒りは更に募りました。

暫くして村長が聞くには「それだけ支払えば仕事に就くのか」私たちは「10銭の者には15銭を15銭の者は17銭にして欲しい」と答えると村長は頭を左右に振りながら「お前たちの要求は高すぎる。以前どおりに仕事を続けるべきだ」と言う言葉を一晚中繰り返すばかりです。私たちは其れには従えないと、引率者に故郷に帰るので勘定を早く出せと迫りました。そうなって、そ奴等は私たちの要求を聞くから、国には帰らないでくれと頼み込みました。

しかし、既に私たちはここを離れる決心を固めた後でした。だから私たちは「あんたたちは

今まで私たちを無視してきた。今になって私たちの要求を聞くと言っているが、私たちはもう、嫌だ。あなたらは私たちが今年仕事をしないと飢えて死ぬとでも思っているようだが、私たち海女が仕事をしなくなったら、私たちよりあんたたちが先に飢えて死ぬのではないか？私たちの要求を全部聞くだけでなく、36銭くれると言ってももう嫌だ」と言いました。

しかし彼らがあまりにも頼み込むので仕事をすることにしました。

無知ではあっても私たち海女は、行くところ、至る所、何千里の海中を職場にしている勇敢な人々である。自信に満ちた決意で、お互いに団結して、そして助け合っていく以外には道は開けない。

1号にも海女が海底の整備工事に使われている記事が掲載されているが、海産物の採集以外にも海底作業などの労働に従事しているようである。

日本に朝鮮の海女が「出稼ぎ」に来るようになったのはいつ頃なのだろうか？朝鮮で最も多く海女が活躍していたのは済洲島であるが、済洲島の海女の歴史は古く『三国史記』には、6世紀に済洲島で真珠を採集している人々の記録がある。

済洲島の海女の日本への「出稼ぎ」について戦前、済洲島関係の様々な研究を続けた栞田一二は「内地で済洲島海女の出稼ぎ地として最も古いのは東京府の三宅島で明治36年金寧の船頭金丙先氏が海女数名を引具し出稼ぎしたのに端を発し、」<sup>(4)</sup>と記述している。

すでに1903年、日韓合併以前から、済洲島の海女は日本に出稼ぎに来ていたのである。植民

(4) 吉田故一『朝鮮水産開発史』朝水会、1954年



地支配を受けるようになってからは、多くの海女が日本に出稼ぎに来るようになった。1915(大正4)年日本ならび朝鮮半島の各地に出稼ぎに出た済洲島出身の海女達の数2500人<sup>(5)</sup>にもなっていた。1932年済洲島の海女漁業組合員数は8862人を数えた—その内5078人が朝鮮の各地や中国の海辺に出稼ぎに出かけ、日本には1600余名が出稼ぎに来ていたという。<sup>(6)</sup>

済洲島の海女が日本や朝鮮の各地に出稼ぎに出るようになった要因は大別して二つある。一つは済洲島の人口が近代に入り急増したことである。その人口を養うだけの産業が島内になかったため島外に出稼ぎに出ざるを得なかった事情と、二つ目は植民地支配により島内の農、漁村の疲弊が激しく、島民達は出稼ぎに拠らざるを得なかった。近代に入り漁村の疲弊は特に激しかった。1800年代後半から近代的な装備を持った日本漁船が、豊かな漁場である済洲島海域に出没して乱獲を始めたため、貧弱な装備の島民の漁民は対抗できず大打撃を受けた。また海女達も日本の近代的な潜水器具漁業業者が大量に押し寄せてきて潜水服を着用して海底から鮑らを乱獲したため、其れに対抗できず漁獲高が激減したため、出稼ぎに出て生計を立てざるを得なかったのである。

海女達の出稼ぎは春に始まり9月末に終わる。『民衆時報』6号には出稼ぎを終えて帰郷する海女達に関する記事が掲載されているが、済洲島の海女達は日本に出稼ぎに来る場合、1922年に定期航路が開設されたためそれ以降は大阪—済洲島航路を利用し、大阪経由の往来が多かった。

海女達は『民衆時報』の記事、手記では主募者と言われている引率者に連れられて各地の海採場に連れられて行くが、この引率者は海女達と同村同郷の者たちが多く、また海女達の連れ合いがなる場合もあって気心が知れている者たちの集団で『民衆時報』の記事に書かれているような悪質な者は少なかったようである。<sup>(7)</sup>

海女達の労賃は、出来高払いと、固定給のふたとおりがあったようだが、1935年当時にはほぼ固定給になっていて、その時期の相場が良く豊漁であれば、固定給にプラスして幾ばくかの出来高払いををすると言う契約になっていたようである。ワンシーズン6カ月間働いて食費、経費、交通費などを差し引いた海女達の収入はわずか約33円程であったという。<sup>(8)</sup>

記事の中で書かれているような引率者が海女達の賃金を持ち逃げしたり、海採場の主採物であるテングサが、国際価格の暴落で雇い主が夜逃げしてしまうことなどもあり、海女達が賃金の支払いを受けられず、帰郷にも窮することもあったようである。

記事の中に書かれている「済洲島海女漁業組合」とは、1920年4月に、出稼ぎ海女達の保護を目的として設立された組合であるが、朝鮮総督府の任命する済洲島司が組合長を兼任するようになり、組合は海女の保護よりも、日本人商人達の利益を計る組織に変貌して、海女達に出稼ぎ証明書発行料金、組合費、販売手数料、監査料、入漁料など様々な名目の料金を課し徴収したため、1930年に海女達がそのような料金の徴収に反対して漁労作業拒否のストライキを起

(5) 江口保考「済洲島出稼ぎ海女」朝鮮詳報、1915年5月

(6) 榊田一二「済洲島海女の地誌学的研究」、1934年、大塚地理学会論文集

(7) 金栄・梁澄子『海を渡った朝鮮人海女』新宿書房、1988年5月

(8) 吉田故一『朝鮮水産開発史』朝水会、1954年

こした。其の紛争はその後も散発的に起きていたが、1932年2月に大規模な「済洲島海女闘争」へと発展した。その時闘争に参加した海女のかずは数千人に達し、百余人の海女が検挙される闘争になった。<sup>(9)</sup> 其の結果海女漁業組合は海女達の要求を幾つか聞き入れた。

其の組合の監視員が八丈島まで出張してきたのであろうが、御用組合という基本的な性格は変化していなかったであろう。海女達の主張を聞き入れるのではなく、ことなかれですましてしまった状況が手に取るように理解できる。

なお、「済洲島海女闘争」は多くの検挙者ならびに犠牲者を出したため、済洲島出身者の多い大阪で「海女事件犠牲者救援協議会」が1932年5月に組織され、救援活動を開始している。その救援活動は「救援」にかこつけた民族独立運動として治安当局の取締を受け関係者の逮捕が続き、協議会は潰れてしまった。『民衆時報』に海女関係の記事が多く掲載されたのは、そのような救援活動関係者が新聞の同人にいたからであろう。

### 3. 人身売買と売春

戦前在日社会で人身売買や売春問題は大きな問題として存在していたようであるが其の実態については明らかでない。それらの状況を報告した資料などが皆無であり、戦前の在日社会での売春の実態について語る人たちもいなかったからであろう。

売春が合法であった戦前、朝鮮の女性達が人身売買される場合、日本の売春宿に騙されて売られるケースと朝鮮人経営の「料理屋」などに売られるケースがあったようである。朝鮮人女

性の日本への出稼ぎは1911年、既に大阪の摂津紡績木津川工場に始まり、多くの紡績工場、製糸工場などで雇用されていた。紡績女工などの朝鮮での募集は、紡績会社の委託で受けた「募集人」と呼ばれる募集ブローカーが行っていたが、其の彼らの中には極めて悪質な女衒まがいの者たちもいて、騙されて「女郎屋」に売り飛ばされた者もいたという。細井和喜蔵の『女工哀史』には「工場へ転々とさせて、果ては女郎に売り飛ばされたり、銘酒屋に私娼に追いやられた例」についての記述がある。拙著『風の慟哭－在日朝鮮人女工の生活と歴史』<sup>(10)</sup> にもかつて女工を体験した朝鮮人女性達の聞き書きの中で売春を強いられた不幸な女性たちの伝聞が記録されているが、其の実態は明らかに出来なかった。

『民衆時報』には人身売買が未遂であったが、其れがどの様な方法であったかをうかがわせる記事と売春制度を糾弾する記事が掲載されている。

天地共に怒る悪党達

人妻を売春、誘惑、監禁し甘い言葉で騙し  
金品を強奪

この無頼漢達を一掃せよ

工場監督という有利な職権を利用して、女性職工を誘惑していた者、哀れな亭主、どうして良いのかわからず世を嘆く老いた母親、誘惑されていった妻を探し出してやろうと金を要求した怪しげな青年、其れでせっぱ詰まった夫と老いた母親は血と汗で蓄えた40円を渡したが、其れでは不足だと言いながら金を持っていったセンセーションな事件。

妻を抵当にして60円を借用した事件、抵当に取った若い女性を利用して利益を上げようとし

(9) 金奉玄『済洲島歴史誌』非売品、1960年

(10) 金賛汀『風の慟哭－在日朝鮮人女工の生活と歴史』

田畑書店、1977年

た人身誘拐商、最終的には警察の世話になった人身抵当事件の顛末。

### 人妻を誘拐して、監禁し金を奪う怪漢

#### 許すことの出来ない其の罪状

市内東成区万歳通りに住む金〇〇は数カ月前からその地に住んでいた。生活は極めて苦しかったが、その老いた母親、若い妻(21)と三人で家の近くにある××足袋工場の職工として働き貧しいながらも、その日その日を平穩に過ごしていた。しかしある日、突然、その妻の姿が見えなくなり、夫は行方不明になった妻を探して調べ回ったところ、意外にも彼ら夫婦の職場の職場監督なる者が自分の妻を誘惑して、連れ去り、行方が分からないことを知った。夫は四方八方探し回ったが探し出せずにいた3-4日後意外にも〇〇(名を伏せる)という青年が訪ねてきて「お前の妻は我々が探し出した。ある場所に身を隠しているから探査費として六八円を支払えばすぐに帰れるようにする」と言う。夫は自分の妻が生きているという知らせはうれしいことではあるが、〇〇の要求する金がないばかりか、その様な言い分は極めて理不尽だと主張したが「あんたがお金を出さないと言うのなら、我々はその職場監督があんたの妻をどこかに連れていくのを黙ってみているだけだ」とかなり立てる〇〇の言葉に、金青年とその母親は血と汗で稼いだ40円を渡しそれで何とかして欲しいと嘆願した。

金青年はある旅館に監禁されていた妻を捜しだしたという。彼らは近所の人の目も恥ずかしいので、国分町のほうに移っていったという。この事件を知った近所の人たちは激憤して次のように語っている。

某氏の話

他人の妻を誘惑した工場監督の奴は、改めて

言うまでもなく許せない奴ではあるが、この様なことが時々起こるのは社会がこの様な者に何らかの制裁を加えて反省させなければならないのにその様になっていないからである。また、妻を奪われた若い夫に探査費等という名目で40円の金を強要し奪い取っていったと言うのは、実に嘆かわしい風潮で慨嘆してもしきれないことである。

この記事は単なる男女の駆け落ち事件の報道ではなく女性を誘惑した男がその女性を売り飛ばすことを示唆した記事なのであろう。さらに次のような記事もある。

### 人妻を抵当にした人肉商の大狼狽

#### 知ってみれば自分の妻を抵当にする常習犯

自分の妻の美貌と美しいスタイルを餌にして、人肉商を訪ね歩き金を借用するのを常習にしている怪しげな者と、少なからぬ利益を夢想して、そ奴に貸したが結局は争いになった結果、去る9月21日、十三警察署に引っ張られて、その罪状が明らかになった事件がある。

その事件は次のとおりである。

市内東成区三国町の〇〇〇番地で朝鮮料理屋を営む(最近廃業)李〇〇の家に、今年五月初旬の頃、彼の知り合いの許某の息子である許成功(仮名)と言う23歳の青年が、自分の妻である李貴蓮(21)と言う美人を連れてきて「私の妻を抵当にするから60円を貸してくれ」と言う。店主の李〇〇は、その女性が美人であることから、自分の利益になると胸算用して、60円を貸し与えた。亭主である許を送り出した後、妻の李貴蓮を店に出すことにしたが、着ている服が粗末なので美しい服を買い、新しい衣服も整え着せたりもし、急いで整えられない物は亭主の連れ合いの服まで着せて、美しく着飾らせてお

いたところ、突然姿をくらましてしまったという。それで行方を探し回っていたが、去る9月中旬、その夫婦が玉造近くにいたことを知ると共に、詐偽にあい被害を受けたことが明らかになったので、その夫婦の所に飛んでいって、彼らを自分の店に連れていき、金を返せ、金はないので返せない、と言う争いになった。結局は警察沙汰となって彼らは検挙された。

60円で女性を抵当に取り、金儲けを企んだ店主は企みが霧散して、妻を抵当に入れて金を借りることを常習にしている夫婦は、警察に身柄を拘束されてしまった。

自分の妻を抵当に入れて金を借りる。現在の常識では考えられないことであるが、戦前の日本社会では間間見られたという。特にヤクザ、不良輩に誘惑されては、その愛人まがいの生活をしていた女性が、売春宿に売り飛ばされるという行為は多かったようである。同様の手口と行為が在日社会にも伝播したのであろう。女性を朝鮮料理屋の「女給」と言う名目で「抵当」に入れ、店主はその弱みにつけ込んで売春行為をさせていた、1935年当時の在日社会の裏社会がこの記事でも明らかである。この記事のようにその様な仕組みを利用して詐欺行為を働く者も現れたのであろう。

当時在日の売春制度は整った娼婦街の様なものではなく朝鮮料理屋の女給を利用した売春であったようである。

この様な「朝鮮料理屋」を舞台にした「売春制度」について『民衆時報』27号は次のような暴露、糾弾記事を掲載している。

#### 人肉市場を撲滅しよう。扶桑雅夫

現在の世の中商品の社会である。何一つとして商品でない物がないほど商品化されている。

人間の労働力が商品化されたのは既に昔のことであるが、現在、一部の社会では人間自体を商品として取り扱っている。

我々は太古、遊牧時代にあつては、強者が弱者を支配して、強い部族が弱い部族を征服して奴隷として使役したという歴史的事実に接するとき、義憤を禁じ得ないが、振り返って、現代のような科学、文明が発達した社会において人身を売買して、人畜市場を開設すると言うことは到底許すことの出来ないことである。

特に非合法的に、又は強制的に、これが公然の秘密として敢行されていることについては根底から撲滅しなければならないことである。現代の社会機構下では資本家対労働者、地主対小作人の支配関係はさておくとして、朝鮮人料理業界で、ほぼ確立されているような人身売買こそ、我々がどの様な方法を取っても、一日も早く根絶しなければならない。

我々是大阪の到るところで朝鮮料理屋を見かけることが出来、そこでは美しく着飾り、白粉を塗りたくった人肉商品が並んでいるのを見せつけられる。その様な魔窟に彼女達が売られてきた経路を見てみると、大部分は生活悲劇、生活不安の果てに仕方なく最後の手段として、身売って自分の命の代価と引き替えに苦境を凌ごうとして商品になってしまった人たちと、不良輩に誘惑され騙され、結局は生き地獄で酔っぱらいをひっつかまえ涙と安っぽい笑いのなかで世を呪いながら、一生を送ることになるのである。

ここで働く女給たちは言葉では尽くせない労働条件と形式的にはある給料の面であらゆる迫害と苦痛の中に置かれ、人身の自由も奪われている。そればかりか、彼女達への迫害は山積している。酒客達の支払いの責任は彼女達にあるというシステムなので、代金が不足するときや、

全然支払われないときはそれらを自己負担しなければならず、その度に彼女達の借金は増え続け、料理業者に支払うために、客に貞操を売って支払わなければならなくなる。

このような奴役のために、その代償として一生を苦痛で苛まれる花柳病をうつされ、結局は魔窟から抜け出す勇気もなくなり、やがて病床で身を横たえることになる。この様になれば彼女たちの運命は更に過酷な物になる。商品価値がなくなったとみるや非人間的な人肉商達は、北海道とか下関地方の仲介ブローカーの手を通じて、彼女たちを転売してしまうのである。この時には彼女たちの借金は更に増えている。ブローカー達への紹介料、地方に行く旅費、衣服代金などの総ての費用が酌婦達の負担になっている。

このような事例は、大阪だけではなく日本の各地に散在している朝鮮料理屋の共通した状況であると言っても過言ではない。更に非難、糾弾されなければならないことは、料理店に出入りする酒客が借金を肩代わりして結婚すると称して家庭生活を営んでおきながら、そ奴が借金で苦しくなると女性を再び人肉業者に売買するという。少しも躊躇することなくこのようなことが行える彼らはどの様な心の持ち主であるのだろうか。この様な所でなければ見聞できない珍奇な事実である。

以上略述した事実は誰もが目撃している厳然たる事実であるが、このようなことを見逃していることは、我々の社会、我々自身にとって大いなる損失である。

人肉業者達も猛省しろ。不安と苦痛の中で泣く酌婦達を覚悟を持って、心を合わせて生活を養護するように努めよう。未成年者にして親の承諾もなく売られていったとき、酒客の酒代を無理矢理に負担させられたとき、病気で仕事に就けないとき、貞操奉仕を強要されたとき、ど

の様な方法であれ、一般社会か当局に訴えよう!!

『民衆時報』に掲載されている人身売買、売春に関する記事はこの三編だけである。当時、在日社会で何人ほどの女性が、売春を強要されていたのか? 「売春婦」を「職業」としている者の数字は存在していない。しかし推測できる統計数字は存在する。1930年の国勢調査の数字である。この年の国勢調査には「外地人及外国人ノ職業」が実施されており、その統計数字はある程度の推測の根拠とすることは出来る。外地人と外国人の中には台湾人、中国人、それに少数ではあるが在日の欧米人も含まれているが、その90%以上を在日朝鮮人が占めていた。この年の国勢調査で女性の職業として「旅館、下宿屋、料理屋飲食店ノ女中、給仕」1678人、「芸妓」35人、「娼婦」2人となっているが、この統計調査の中にはかつて紡績女工として日本に連れて来られたハルモニ（おばあさん）たちに聞いた売春宿に売り飛ばされた女性の調査はしていないようである。ハルモニ達の話では「娼婦」は2人というような少人数ではなかった。この国勢調査の統計での問題は1678人の「女中、給仕」であろう。『民衆時報』の記事によれば、朝鮮料理屋の「給仕」の多くが売春を強要されているという。いずれにせよ、在日朝鮮人の歴史の中で明らかにされていなかった、売春問題に『民衆時報』は切り込み、その実状についての事実を報道している。

#### 4. コラムに見る世相

『民衆時報』には1935年当時『朝日新聞』に「天声人語」、「毎日新聞」に「余録」があったように、毎号ではないが「声方尚志」「左衛右突」の二つのコラムが掲載されていた。前者は



150字から300字程度、後者は350字から400字程度の短いコラムである。それらのコラムは、ときには皮肉を効かせ、時には辛辣に、そして鋭く当時の在日社会をとりまく問題を取り上げている。「声方尚志」は主に在日問題での日常で起きている様々な問題を扱っている関係から、全文ハングル文字で書かれており「左衛右突」は国際問題、朝鮮半島情勢などを主題にしている関係からか、漢字混じりの文章である。編集部の方針として、その様な使い分けを意識的にしていたのであろうが、時には同時に同胞問題を取り上げていることもある。

#### 「左衛右突」第3号（1935年8月1日）

米国国務長官ハル氏は不戦条約の空文化を嘆いているという◆最初に関税障壁を設けたのは米国である。関税戦争は戦争ではないのか◆最近、太平洋の制覇を巡る角逐、その勝利こそハル氏の秘められた胸のうちであろう◆朝鮮の大量の満州移民は、その声だけでも大地を泣かせている◆満州でも朝鮮と同じ様なことが起これば、その土地の人々はどこに移民するのか聞いてみたい◆暴力取締には〇〇会（注 相愛会？）にも調査の手が及ぶと・・・事実暴力団体であるのに。

このコラムを読みながらこの時代、日本帝国主義が満州支配のために五族共和を高々と宣伝し、日本と朝鮮から多くの「開拓」移民を送出しているとき、その日本の満州支配の重要な政策である「開拓」政策を痛烈に皮肉り、批判している記事がよくも書けたという思いが強い。生半可でない凄さと覚悟を感じる。

満州への朝鮮人の移民は1934年日本政府の「閣議決定」である「朝鮮人移住の件」で政策として遂行された。それは朝鮮人の日本内地移

住を厳しく制限する代わり、朝鮮の没落農民を満州に移民させ、その地の「開拓」と「国防」に当たらせるというものであった。その「開拓」であるが、開拓とは名ばかりで事実は「満州」に住んでいた中国人の土地を強奪して、それを日本人、朝鮮人の「開拓民」に分け与えたのは周知の事実であり、この時点で、すでにその事実を見抜き、なおかつ、朝鮮の農民が東拓等によって土地を奪われていった歴史的事実を見据えて、満州で土地を奪われた中国人農民はどこに移民させるのかという、日本帝国主義の「開拓」政策の矛盾と偽満を鋭く、そして的確に指摘している。

このコラムに対しては一言「凄い」と言うだけである。

#### 声方尚志 第8号（1935年10月15日）

京都中央保育園は天真爛漫なわれわれの子供を見してくれる遺児其のである◆そこには家もたてなければならず、家内用品も備えなければならず◆この保育園一つを維持できるかどうかで京都の兄弟姉妹の保母としての評価は決まる◆取り巻く条件は非常に悪化している様子、最近も20名が検挙されたという

在日朝鮮人の労働運動家、社会運動家の多くが厳しい取締、弾圧体制の下で警察に検挙される情勢にあって、検挙された家族のための救済組織などが作られた。ここで言う「京都中央保育園」もそのような組織、施設の一つであろう。これら施設の運営は篤志家のカンパなどで賄われたので、その維持は大変困難であったようである。新聞では検挙者20人とあるが、1934年、5年日本国内で治安維持法違反で検挙された人々は609人、そのうち朝鮮人は67人<sup>(1)</sup>であるという。治安維持法以外の罪名で検挙されたり、検

挙されながら何月間の警察の留置場をたらい回しされ、その後処分保留で釈放される人々も多く、公式に検挙、起訴されたと言う発表の数字の何倍かの人が長期間留置所暮らしを強いられていた。長時間の拘束でその家族の生活は非常に困難であった。

京都中央保育園に関する記事が10号に掲載されている。

#### 更生した中央保育園

在京都朝鮮人自動車運転手親睦会同志と有志の協力で (10号 11月15日)

京都市左京区田中玄京町にある京都朝鮮幼稚園は、昨年11月から院長高光模君の耐えまいな努力と各方面の声援を受けて、同胞幼児たちの訓育に力を入れてきたが、一部人士の無理解により、園舎の立ち退きにあい、さまざまな困難にあってきたが、最近も経営危機から廃園の瀬戸際にあった。京都に在住する朝鮮人自動車運転手親睦会の支援の下、園舎を京都市西千本通り松原下に移転して、其の名称も在京都朝鮮中央保育園と改称した。有志会を組織して経営方針をたて父母会の応援を受けて1千円基金を集めようと活動中であるという。この基金集めが成功すれば保育園の専属の自動車を購入して、園児の通園に便宜を計ることになるだろう。現在収容されている児童数と同園職員は次のとおりである。

児童数 男児19名 女児10名 園長1 保母1  
理事長1 理事1

この記事以外にも中央保育園に関する記事は2、3掲載されているが経営難を克服して頑張っ

ているという紹介記事である。

#### 声方尚志 (9号 11月1日)

米価が高いために9月の生活費は平均して一分二厘(1.5%)高くなったというが秋になって新米が出、米価はようやく一キロ当たり一厘下がったという。しかし、どの小売商を回って見ても値段は以前と変わらない。何故なら一合だとか一升だとかを買う人に五厘の米価の引き下げは価格に反映しないからである◆生活が極度に疲弊した日本の山村の子供たちは学校でも欠食児童が増えているという。欠食児童たちの食事では稗飯、さつまいもは良いほうだという。◆矯風会の活動の中には一握りの米の節米運動もあるという。ソンビョンヒの経済学でも熱心に研究しなくては。

矯風会と言うまでもなくキリスト教婦人矯風会のことで1873年にアメリカで設立され日本でも1893年に組織され、禁酒、廃娯、平和を唱えて活動した。

#### 声方尚志 (10号 11月15日)

漢方薬草商の中には生理、衛生が何であるかも知らず、酷い者には本草についての知識もないのに、いっぱしの漢方医の様な振りをして、危険このうえない製薬と診察をする輩が大阪にも多いという◆そやつらは正体もわからないような物品をキョンオッコイと騙すインチキ者もいる◆漢方の評価と信用を落としているのは漢方自身ではないのか。

日本に渡ってきた朝鮮人にとって病気にかかったときの不安と苦痛は計り知れないものがあっ

↘ (11) 内務省警保局『思想月報』第40号「治安維持法違反により起訴された朝鮮人に関する調査」、昭和12年10

た。日本の病院の中には朝鮮人を受け入れてくれないところも多く、その上、診察してくれたとしても在日の期間の短い人は、十分に日本語が話せない言葉の障壁のため、自分の病状や苦痛を正確に医師に説明できない人も多く、さらに診療費が高いこともあり、病気にかかっても医者に見てもらわず、朝鮮人の漢方商から薬を買って治療する人が多かった。そのため漢方商が繁盛したが、そんな漢方商の中にはインチキな者もいたようで、そのようなインチキ医療に対する警鐘なのであろう。

#### 左衛右突（13号 1936年1月1日）

今年の公定米価は昨年よりも50銭乃至一円も高くなった◆賃金は上がらないのに米価が高くなったため今年はすきっ腹を抱えることになる◆米価が高くなったのだから農民たちの懐は少しは暖かくなったのであろうか◆しかるに朝鮮の農村では債鬼の戸別訪問が年末激しかったという◆大阪の町の風景の一つとして常に見かけるものに「二階貸間アリ、但シ内地人ニ限ル」◆新年を迎えたのだから露骨な民族偏見を無くしたいものである◆脱税疑獄の府議員も旧年の幕を降ろすことになるのだろうかこの会期中朝鮮人を代弁するものが一人もいなかった◆しかしながら選挙当時には立候補者の全員が朝鮮同胞に役立つと呼びかけた◆6万円の保険金に目が眩み自分の子供を殺した父親がおり◆2千円の欲のために自分の家に放火した元教授の牧師もいた◆どうであれ世情どこか狂い生きずらくなった◆食するものもなく、着るものもなく生活貧窮を究めて行けば、人心の行き着くところこのようなものであろう

1935年に大阪府では府議會議員選挙があった。選挙では前述したように「融和団体」が朝鮮人

の票の売買に動き回り、朝鮮人を集めた演説会では、朝鮮人の権利の擁護を各候補が約束したが、当選した後は知らん顔という現実を皮肉ったのである。在日の人達もそのようなことは百も承知であったのであろう、投票率は自分たちとは関係のない選挙という意識からかきわめて悪い。内務省警保局の「昭和10年 社会情勢の状況」では「大阪府の棄権率七割一分七厘を最高・・・平均六割七分四厘の棄権率を示し・・・内地人全国平均棄権率二割一分三厘に比して大なる懸隔あり。」と報告されている。在日の朝鮮人の多くが選挙が彼等自身の生活と権利に何の関係もないと感じていたのであろう。ちなみにこの年の選挙で立候補した朝鮮人は衆議院選挙2名、府県議選挙2名、市会選挙41名であったが当選者は市議会選挙の5名だけである。

#### 声方尚志（14号 1936年1月11日）

聞くのもおぞましい話がある◆14歳になる少女が恋愛遊戯の末はらんだという◆48歳になる男がそのてて親だという◆その話を聞き頗る気持ちが悪い◆その者は恋愛遊戯に現を抜かし、金銭を与えた少女が8人とも14人とも言う◆父母たちの監督不十分もその責任の半分は負わなければならないが◆少女たちの軽率、浮薄な行動にはため息が出る◆蚊を見て剣を抜く（つまらないことに真剣になっていること）式のことで、それは声を放って泣く材料にもならないが◆一部の読者から何度も寄稿を頂きそのままにはしておけないのではと◆鼠のような寄生虫の朝鮮人がある日本語新聞にあることないこと書き連ねている◆鼠の頭ほどの知識しかないのに◆年頭所感を恥ずかしげもなく披露するとは何かの笑い話か◆たぶん年末の広告の募集がうまく行かなかったからなのであろう◆その上三大新聞の支局長ともあろうものが◆朝鮮のインテ

りがどうのこうのだって? ◆100匹の小犬がキャンキャン泣くようなもので朝鮮の言論界には何の痛痒も感じないが◆小犬は虎の怖さを知らないで吠えるのと同じで◆ふくらはぎを少し叩けば、いや尻を蹴り上げれば分かるだろう◆珂珂一笑

この年の日本語新聞のある人物の年頭所感に何びとのどのような所感が掲載されていたのか具体的に指摘して欲しかった。

#### 左衛右突 (15号 1936年1月21日)

最近日本の二大新聞、三大新聞などと称する新聞を少し読んで見るといい◆朝鮮人に関する記事は頭から挑発的な言葉の羅列である◆何かにつけ「チョウセンジン」泥棒も「チョウセンジン」◆何処かで誰かがへをひいても「チョウセンジン」と言う按配である◆京都の某中学校では朝鮮人学生に「チョウセンジンノクセニ」と言って侮辱的な言葉を吐いた日本人学生がいた◆そのとき朝鮮人学生の鉄拳が加えられ憤激は収まったが◆賢明な? (愚蒙) 学校当局は朝鮮人学生だけを二週間の停学処分に処した◆与論を指導するという言論機関も、神聖でなければならない教育者も民族的偏見で一杯である◆この病気は伝染病によるものなのだろうか? それとも遺伝するものなのだろうか? ◆この病気を治すためにはハワイか米本土に送らなければ。

日本のあらゆる階層、社会に深く根を張っている朝鮮人に対する民族的偏見、蔑視に対するやりきれない思いがコラム全遍に満ち満ちており、コラム氏の思いがひしひしと伝わってくるようである。

#### 方声尚志 (15号 1936年1月21日)

最近結婚する人が相当多いという◆騒がしくければしい式を簡略にできないものか◆それなのに招待状はなぜあのように粗末なのだ◆道端でちょっと会っただけの人に仰々しく招待状を送ってくる◆時には3、4年前までは自分の親のチェサ (法事) に案内状を送ってきたものである◆これでは招待状が扶助のための強要になっている◆今後このような弊風をなくすることはできないものか◆市内某医院ではゲンコツをくわすと言う風文がある◆この先生は心安らかでないときは看護婦をぶつという◆拳闘クラブにでも行って一回戦って見ればどうか◆それとも医院を少し休んで精神病院に行ったほうが良いのではないか◆どうであれ聞こえてくる噂はすこぶる悪くご用心ご用心。

#### 左衛右突 (19号 1936年4月1日)

ヒットラードイツ総統、爆弾宣言投下◆爆弾ドイツの爆弾宣言には何ら怪異なものはないが、それでドイツの末路は爆発で飾られるのではないのか◆中国共産党軍が山西省を犯しているので防共が緊急のことと、北部中国に出兵の口実が立派にたつ様子◆外蒙古に対する宗主権問題で中国が国連に提訴しないと非常に寛大なのは新しい何かがあるというのか◆中国も過去にあった辛い経験が多くそれらがまだ消え去っていないのであろう◆ソ満国境問題、満蒙国境問題、最近は交火 (発砲事件) が少し過ぎるようだ。このまま行けば大事が起きるのではないか◆東に西に世の中噴火している◆大阪市東成区鶴橋第×尋常小学校では朝鮮人学童が300人にもなる◆それなのに、その学校の訓導竹×某は朝鮮学童で言うことの聞かない児童がいると「コノチョウセンブタ」と頭を殴りつけるという◆このような訓練を多く養成すれば民尊差別を励行

するのも容易というものである◆校長の椅子一つに千円だとか二千円だとかが懸かると言われているような社会で竹×某の様な訓導が居てもそれほど怪奇でもないのであろう◆強制送還！最近大阪東成区では誰だれが送り返されたとか西淀川区でも誰だれを送還したとあちらでこそそこちうでこそこそと噂になっている◆渡航抑止のため人々を送還しているが残されたものはどのようにして生きろというのか？気の毒なことだ

この号の「左衛右突」は実にさまざまな問題―国際問題から在日問題までを書き連ねているが実に鋭い。コラムで取り上げられているヒットラーの「爆弾宣言」とは1936年3月7日のヒットラーの宣言をさしており、それは第一次大戦後のベルサイユ条約で禁止されていた再軍備のための徴兵制の実施の宣言を1935年3月に行い、その一年後には、ドイツ西部国境地帯のラインランドを非武装地帯とする「ロカルノ」条約を破棄して同地帯に軍隊を進めた。その「爆弾宣言」による行動がドイツの滅亡を招くと断言したコラム氏の先見の明には驚かされる。

ソ満国境、満蒙国境での「交火」についても言及しているが1935年度の国境地帯での武力を伴う紛争は176件に達し<sup>(12)</sup>1938年の長鼓峰事件、1939年のノモンハン事件の大規模な日、ソ蒙軍の大規模武力紛争へと発展した。そのことも併せて予見している。

コラムでは尋常小学校での教師たちの朝鮮人児童に対する民族差別言動の一端を示しているが朝鮮人に対する戦前の差別感、劣等民族観は多分に学校教育の中で育まれた。教科としては「尋常小学校 国史」での徹底した「朝鮮民族

劣等民族観」教育であろう。

コラムで言う「訓導」とは戦前の小学校の正規の教員の称で、現在風に言うならば教諭と言うことになる。

#### 左衛右突（27号 1936年9月20日）

朝鮮の農民は毎年苦しんでいるというのに、今度は大暴風と水害だという。これは何の自然の錯乱なのか◆死傷者6千人、行方不明者千数百人、罹災民数は百万人、被害総額は一億円以上であるという、考えるだけでも身震いがする◆風により痛めつけられ、それでも不足するか豪雨に次ぐ豪雨による冠水。非情なことにはなはだし◆自然の試練である。再建のため勇気を呼び起こさなければならない。意気消沈して呆然としているときではない◆まず生命を保ち今後の生活を考えることである。飢餓と寒気に追いかけている人々には百、千の激励の言葉よりも一杯のご飯、一着の着物が百倍千倍に優のである◆同族の涙、同族の悲しみは私の悲しみである。目に見えないからといって、どうして三度三度の食事が喉を通るというのか◆満天下の兄妹、まず塗炭の苦しみに喘ぐ兄弟を救援しよう◆来日している同胞たちの罹災民救援活動は大きな関心を引き起こしているがその行動の一つ一つが感激なくして聞けないものである◆中でも東京の留学生たちで組織された留学生有志南朝鮮風水害救済金募集隊の活躍はその規模と熱意において賞賛せずには措けない◆学窓で学ぶものは万卷の書物と格闘して死ぬような学問に没頭するのではなく、すべからくこのような意気と熱意で万事に対応することを知らなければならない◆孫基禎のマラソン制覇に喜んだのも束の間、水害暴風雨に曝され、その後

(12)金賛汀『シルクロードの朝鮮人』情報センター出版

局、1990年12月



は言論機関の〇〇（注 〇〇は閉鎖、又は廃刊であろう）が来た◆東亜日報の停刊処分、中央日報の休刊、その理由に言う。孫選手の写真の日章旗マークの削除云々◆其の是非曲直についてはここで論ずることは避けるが、いかに朝鮮総督府警務局の検閲係の眼光の鋭いことよ◆其の責任者の処分だけでは満足せず、言論機関全体を停刊にするのは過酷すぎるといわざるを得ない◆一般読者には考えてもみない事実を摘発し、朝鮮民衆のセンセーションを呼び起こし、異常な注意を引き付けた効果がなきにしも非ずである

このコラムで述べられている、この年の暴風雨による被害については日本の新聞も大きく報道しているが『民衆時報』27号でも大きく取り上げ、二面の全紙面を使い「惨！濁流、台風の狂舞、未曾有の南朝鮮大風水害 被害総額八千万円突破、百万生霊が惨痕に彷徨う」と報道している。さらに学生たちの救援運動についても「救援ののろし、東京の留学生たち決起 熱意と赤誠で武装した救済金募集隊 街頭で訴える学生群の叫び声」と報じている。

この学生たちの救済運動については日本の治安当局も関心を持っており、内務省警保局の『特高月報』では、その年の8月分、9月分、10、11、12と実に5カ月の長期間に渡って数多くの報告をしている。『特高月報』が同じ問題と状況について5カ月の長きに渡って、報告を掲載しているのは究めてまれないケースである。それは学生たちの救済運動の規模が大きいことと、救済運動が独立運動に転嫁する危惧を強くしていた為の監視活動でもあった。それは『特高月報』の1936年11月分の「南朝鮮水害救済運動の状況 其の四」で次のように報告していることから判明している。

「・・・而して本運動を觀するに、單なる罹災者の救済活動に非ずして其の多くは在留一般朝鮮人の民族的感情に基づく同胞愛の發露にして、著しく民族意識を刺激して更にこの間の左翼または民族主義分子の利用されるが如き感あるを以て将来この種の取締については相当の注意を要するものと思科せられる」

日本の治安当局は風水害の救済運動すら、危険視して監視を怠らなかつた状況が手にとるように理解できる。

コラムで孫基禎選手のベルリンオリンピックマラソン優勝と、それに関連する東亜日報社の廃刊事件を論じている。このコラムでは当時、事実関係が一切報じられなかつたこともあつたのであろう、2、3の事実関係で誤つた報道をしている。東亜日報社が孫選手の胸の日章旗を削除した写真の検閲を「朝鮮総督府の検閲係」と書いているが、その事実を最初に発見して、記者たちを連行したのは朝鮮軍第20師団の軍司令部であつた。「満州事変」以降準軍事体制下にあつた日本の政治体制は2・26事件以降急激に軍事独裁体制を強化しており、朝鮮でも植民地政策で朝鮮総督府よりも朝鮮軍司令部の発言権が強くなつており治安対策でも直接、指示、行動していた。この事件でも軍司令部が真っ先に摘発に乗り出している。

また、この写真を巡る取扱は、日本では問題にもならなかつたし、話題にもならなかつたが、朝鮮では新聞の刊行時、編集者たちによってさまざまな取扱方が研究されていた。後程詳しく触れるが、他の多くの新聞、雑誌なども同じ様なことをしていたからである。

『東亜日報』の廃刊処置については『民衆時報』27号（1936年9月21日）でこの事件を記事として掲載している。

受難に喘ぐ朝鮮に憂慮山積  
東亜日報停刊、中央休刊処分  
暗黒化する：朝鮮言語界：

朝鮮の天地はさまざまに起きてくる受難の報に言葉に尽くせない憂鬱感に囚われている。一つは前代未聞の大暴風水害により人が死に山が崩れ、家屋が押流され9百万の生命が危機にさらされ、そのうえ言語界では東亜日報は停刊、中央日報は休刊処分を受けるという一大「センセーション」が起きている。

その理由ははっきりとは判明していないが、聞くとところによれば、過日、オリンピック大会で優勝の栄誉に輝いた孫選手の写真の日章旗マークを削り去ったことが理由というが、そのようなことがあったとは少しも知らなかったし、一般の人々もそこまで注意深く関心を持っていなかったが、このたびの停刊処分で、そのようなうわさが広がり初めて知った次第である。

現代の朝鮮では新聞はあればあるほど必要な状況にある。新聞が一般民衆生活を組織し反映しているのを考慮すれば、そのことは明らかであり、朝鮮文化の改革でも新聞の使命は多きものがある。そればかりか、今回の大風水害において果たした報道機関の役割を考えればそれが絶対に必要であるにもかかわらずこのような処分を下したということもはどのように見ようと好ましいことではない。あまり関心を持っていなかった一般民衆も、事件を摘発することで知るところとなり、静まっていた心境に衝撃を与えたことは、結果として全体的に莫大な損失ではなかったのか？

今、一般社会ではさまざまな噂が流れている。今後この問題がどのようになろうとも一般民衆は一日も早く両新聞が復活することを願っている。

『民衆時報』の記事は『東亜日報』などの停刊処分の記事を掲載するにあたり、当局の摘発、処分を真正面から批判はしていない。当時厳しく監視されていた編集部が正面切って批判できる状況になかった。すでに数回の発売禁止処分を受けていた民衆時報社にとって強い調子の抗議記事は自殺行為であったからである。それゆえ、東亜日報社を摘発することで起きる弊害のような問題を記事にすることで、間接的に批判したのであろう。

なお、孫選手の日章旗削除事件とそれにかかわる状況を日本の報道機関は一切報道していない。少なくとも当時の東京、大阪の『朝日新聞』、『大阪毎日新聞』、『読売新聞』、『東京日々新聞』など日本の商業紙の紙面には掲載されていない。これらの紙面に掲載されていないと言うことは、多くの他の新聞でも掲載しなかったのであろう。とするならば、日本国内で、これら一連の事件を記事にして公刊した新聞は『民衆時報』と当時東京で発刊されていた朝鮮語の新聞『東京民衆時報』だけということであったかもしれない。この事件は『民衆時報』への廃刊処分と関係があると思われるので少し事実関係を追って見たい。

ベルリンオリンピックのマラソン競技で孫基禎選手優勝、南昇竜選手三着入賞のニュースの第一報が東京、京城に届いたのは8月10日の午前1時35分頃であった。日本、朝鮮の各新聞は号外を発行し、朝刊でも大きく報じた。京城では人々が興奮して街から街にかけずり回り、東亜、朝鮮、中央の各新聞社の前では新聞報道に興奮した群衆が「バンザイ！バンザイ！」と絶叫していた。「万歳」は日本語の「バンザイ」で朝鮮語の「マンセイ」ではなかった。朝鮮語で「マンセイ」を叫ぶことは朝鮮独立を想起さ

せる行為として治安当局から厳しく禁じられていたからである。そのとき報道された孫選手たちの写真には、どれも胸に日章旗のマークが付けられており、多くの朝鮮人は愕然とし、そして悲憤に囚われていた。それは報道機関で働く朝鮮人たちも皆同じ思いであった。孫選手の胸の日の丸を何とかしなければ、と言う思いは報道機関で働く人々に共通した思いであった。例えば、東亜日報社では新聞以外にも雑誌も発行しているが、月刊婦人誌『新家庭』では、孫選手関連の日の丸を掲載したくない処置とし、孫選手の足の部分だけを掲載して「これがベルリンオリンピック優勝者、偉大なるわれわれの息子、孫基禎の足」とのコメントを付けて写真を掲載した。そのような思いは各新聞社の社説に鮮明に現われている。

東亜日報 8月11日の社説は「朝鮮マラソン孫、南両選手の偉績」と題して次のように述べている「・・両君の優勝は即ち朝鮮の優勝であり、両君の制覇は即ち朝鮮の制覇である」「・・今や孫、南両勇士の世界的優勝は朝鮮の血を沸かせ脈拍を躍らせた。而して、一度たてば世界も掌中にありとの信念と気概をもたらした」

また、中央日報の社説は「・・一つの勝利は他の勝利の準備の基礎石となるべく、一つの領域の勝利は他の領域への拡大する、より一層の努力と刺激とならなければならない」(8月20日付社説)と各々社説を掲げている。それらは言うまでもなく朝鮮の独立を示唆するような内容であったので、治安当局も神経をとんがらせて警戒していた。

そんな雰囲気の中で東亜日報社の日章旗削除の新聞が発行されたのは、孫選手の優勝の日から16日目の1936年8月25日である。それは編集

局幹部の同意の上に行われた。問題の新聞が刷り上がったのは『東亜日報』が夕刊紙であるため、午後3時午後であった。写真は『アサヒスポーツ』からの転載写真で、胸には鮮やかに日の丸が浮かんでいた。転載写真は一版の朝鮮総督府に提出する事前検閲用の紙面にはそのままであったが、二版目からそっくり削りとられていた。

その事実をいち早く察知したのは前述したように朝鮮軍第20師団司令部であり、午後4時には、速くにも同師団司令部から編集幹部の呼び出しがあり、午後7時には大量の記者たちが、当地を管轄とする東大門署に連行され始めた。その後、連行は中央日報社などにも及び、朝鮮の言論界は上や下やの大騒動に発展していく。

この事件を孫選手が知ったのはかなり後である。

孫選手はベルリン大会のあと、欧州各地からの招待を受けて、至る所で歓迎攻めにあっており、日本代表団とナポリ港からコンテ・ロッセ号で帰国の途に就いたのは9月24日であった。そのとき孫選手は東亜日報社の日の丸削除事件に就いて何も知らなかった。

孫選手が朝鮮で自分との関係がある問題で何か大事件が発生しているらしいと知ったのは、船がインド洋からマラッカ海峡に入るときであった。知人からのお祝いの電報のあとに「言動に注意、日警に用心」と書いてあり、朝鮮で自分と関係があることで何かがあったことを察知したが、それがどのような問題であるかは分からなかった。<sup>(13)</sup> 船がシンガポールに寄港したときは私服の尾行が就いた。それがますます二人を不安にさせた。事情が判明したのは船が上海に寄港した10月3日の時点である。上海は朝鮮独

(13) 鎌田忠良『日章旗とマラソン』潮出版、1984年

立運動の海外の拠点の一つであり、多くの朝鮮人が生活していた。歓迎祝賀の人々のなかには同胞の一人が東亜日報事件をくわしく話した。それを聞いた両選手を襲った感情は日本当局への怒りと今後、さまざまなことが起きることへの憂鬱であった。

10月6日、船は日本最初の寄港地長崎に着いた。そこで選手団のうち、両選手にだけボディ・チェックが警察の手で行われていた。孫が何のための検査かと聞くと、私服の刑事は「万一ピストルやあいくちでも持っているといけないから」と説明したという。

船が神戸港に着き、陸上チームのメンバーが上陸したのは10月7日、一行はそこで解散したが、それ以降はおおのの個人的な歓迎会などが開かれた。それらの会合でも孫、南選手には特高警察の厳重な監視がついた。日本で両選手の歓迎会、優勝祝賀会などは日本人団体のものは開かれたが、朝鮮人関係だけの会合は開くことができなかった。それについて治安当局は「・・・朝鮮人のみをもってする別個の歓迎会慰労会等の開催を許すにおいては、民族的感情の赴くところ、内鮮人対立の気運を醸成するの虞なしとせざるものあるに鑑み、警視庁においては朝鮮人のみの歓迎会等は一切認めない方針を採り、前記在京朝鮮人の歓迎計画に対しては論旨中止せしめ、都下各大学朝鮮留学生の秋季陸上運動会に対しては、歓迎空気の鎮静後開催せむべく延期方を論旨する等、嚴重取締を加えあらゆる不穩策動を阻止せり・・・」<sup>(14)</sup>と報告している。

『民衆時報』は9月21日の第27号が発行された4日後9月25日、民衆時報社の幹部たち数人が大阪府警察部特高課により検挙された。其れを報じた『特高月報』には直接の検挙容疑につ

いて何の事実関係も示していないが、27号の何らかの記事が直接の検挙の口実に当たるとするならば、『東亜日報』の停刊を報じた記事以外に該当する記事はない。

『民衆時報』は多分、日本の新聞などが一切報道しなかった『東亜日報』などの停休刊を報じ、そうして、そのことを批判したために創刊以来の民族主義的、左翼的傾向が強い同紙の幹部たちは検挙されたのであろう。10月1日に発行されるはずの28号は発行されていない。それ以降の『民衆時報』は私の手元にない。『特高月報』の報ずるように、11月1日に廃刊届けが出されるまで月3回計画どおり新聞が発行されていたとするならば、35号まで出た計算になるが、何れにせよ、それらは手元になく、未だにそれらの現物を見ていない。28号以降、発刊ができない状態であったのであろう。『民衆時報』は廃刊の辞も掲載することなくつぶされた。

民衆時報が廃刊に追い込まれるこの時期は、戦前の在日社会が大きな曲がり角に立ち、侵略戦争協力体制へと再編される時期、朝鮮人の立場から発行された活字活動の終焉期でもあった。『民衆時報』が廃刊に追い込まれた後、合法的に朝鮮人の立場に立って発行されていた朝鮮語新聞は『東京民衆新報』だけであったが、それも1937年8月、発行人金浩永が検挙され遂に1紙も残さずつぶされてしまった。<sup>(15)</sup>

## 5. この時期日本で発行されていた 在日の新聞と発禁処分

『民衆時報』の1935年12月15日号（12号）では『東京朝鮮民報』に関する記事が記載されている。次のような内容である。

(14) 内務省警保局『特高月報』、1936年11月分

(15) 内務省警保局「昭和12年 社会運動の状況」

## 面目一新した

### 東京朝鮮民報

#### 新活字鑄造新社屋建設

東京朝鮮民報は従来から週間期成運動を起こし多大の努力をしてきたが、一般大衆の自己犠牲的援助と熱い支持の下、順調に進展しているという。この期成運動の前奏曲として8ポ印刷活字を鑄造しようと、字母の準備ができたので、ある篤志家の寄進で東京芝区田村町49にある30余坪の二階建てを改築して、新社屋も建築することになった。東京朝鮮民報社のこのような発展は同胞のために大いに喜ぶとともに同胞社会では、その成果に多大の関心を持っている。

『東京朝鮮民報』は『民衆時報』『朝鮮新聞』と共に左翼系民族主義的な立場から治安当局の厳しい監視下で、在日朝鮮人の権利擁護、民族差別反対の論陣を張っていた朝鮮語新聞である。1936年当時、在日社会には治安当局の発表では61の新聞が発行されていたが、そのような立場を鮮明にして、きちんとした論陣を張っていたのはこの三紙だけである。当時日本で発行されていた在日の新聞について、内務省警保局の報告書は次のように報告している。

#### 第13、印刷物の発行状況

(2) 合法印刷物 各種朝鮮人団体又は朝鮮人個人に於いて発行する機関紙その他合法的印刷物、一定の題号を用ひ定期又は不定期に継続的に発行するものとしては、次表に示すが如く、僅に警視庁以下11府県管下 に於いて発行する61種にして、其の大部分は東京に於いて発行に係わるものとする。

これらの印刷物は動もすれば筆致常軌を逸し

不穩矯激なる記事を掲げ、発禁処分 に付せらるる事例少なからず、特に注目 に値するは諺文に係わるものにして、東京に於いて発行する「朝鮮新聞」同「東京朝鮮民報」大阪に於ける「民衆時報」は内地に於ける諺文新聞として特異の存在を示し、特に「朝鮮新聞」「民衆時報」の二紙は新聞の合法性を利用して、分散せる左翼分子の糾合統一を計りつつありたり。其他の印刷物と謂えども、朝鮮固有の諺文を通じて不知不識の中に往時追慕の念を湧起せしめ、或いは民族的反感を誘発せしむる処あるのみならず、在住朝鮮人の国語普及を疎害し、新旧同胞の同和協調を妨ぐるること少なからざるものあるを以て、将来努めて此の種諺文印刷物は、国語を以て代へしむべく指導誘導するの要ありと認めらる。<sup>(16)</sup>

この報告書でも明記しているように、『朝鮮新聞』『民衆時報』『東京朝鮮民報』について、治安当局は極めて要注意の監視体制をとっていたことが判明している。ハングルによる新聞発行も、近い将来禁止する意向も示している。事実これら三紙は相次いで廃刊に追い込まれた。

私の手元には『朝鮮新聞』の創刊号以下何号かの新聞がある。『民衆時報』を所持しておられた康氏が保管しておられ、私に譲り渡して下さったものである。この『朝鮮新聞』については些か臆に落ちないことがあった。『朝鮮新聞』について高峻石氏はその著書『在日朝鮮人革命運動史』の中で「高麗共產青年会日本支部のメンバーだった李雲朱は1935年刑期を終えて出獄し、朝鮮人一般大衆を文化的に啓蒙して民族的、階級的意識を高揚することが急務であると考えた。そして彼はその方法としてハングル新聞を

(16) 同上



発行することを決意し」そして『朝鮮新聞』創刊号（1935年12月31日付）は「在留朝鮮人、特に労働者の文化向上と彼等の社会的階級的自覚を喚起せしめる」ことを標榜した創刊趣旨文などの記事を載せ、4000分を発行した。だが300部を頒布しただけで残りは日本の特高警察に押収されてしまった。<sup>(17)</sup>と記載されている。

しかし、私の手元にある『朝鮮新聞』創刊号は1936年2月1日付であり、記載されているような「創刊趣旨文」もない。手元にある創刊号のトップ記事は「新年初頭に創刊号を発行するにあたり、読者諸君努力しよう」である。これらの新聞が別々の新聞かとも考えたが、発行兼印刷人が李雲朱であることから別々の新聞とは考えられない。そのような疑問点を抱いていたが、あるとき、内務省警保局「社会運動の状況」に記載されている「在留朝鮮人印刷物発行一覧」表に「朝鮮新聞 創刊準備号12月31日発行 1月10日禁止」の一行の記載を見つけ疑問は氷解した。朝鮮新聞は創刊号に先立って創刊準備号を発行していたのである。

『朝鮮新聞』はなんと創刊準備号から発禁処分を受けていたのである。このように当局から危険視されていた『朝鮮新聞』はその後苦難続きであったが、1936年7月の一斉検挙で、発行人の李雲朱は警察に連行され、新聞も廃刊に追い込まれた。『朝鮮新聞』は創刊準備号も含めてわずか7号で廃刊になっている。

『東京朝鮮民報』は『朝鮮新聞』に比べればかなり長期間発行されていた。治安当局の報告書によれば「警視庁編入特要鮮甲金浩永の発行になる『東京朝鮮民報』は本年（1935年）2月

15日付第5号の発禁処分を受けたるを始めとし、  
重來殆ど発行の都度発禁処分を受けつつあり・・・」と報告されており<sup>(18)</sup>その後1936年の状況について報告書には「諺文新聞『東京朝鮮新報』の策動」と言う報告があり、そこでは『東京朝鮮民報』が資金難のため発行が困難になったが本年9月、東亜日報支局、朝鮮日報支局等の後援、出費を得て9月15日付第33号より『東京朝鮮新報』と改題して毎号2000部発行して「本年11月1日在阪『民衆時報』廃刊後は内地唯一の諺文新聞として特異の存在を続け来れり・・・」<sup>(19)</sup>とある。

そして、1937年の報告では「特に諺文『東京朝鮮新報』は合法性を利用し盛んに民族共産主義意識の高揚に努めつつありたりが別項記載のごとく、本年8月20日発行人金浩永の検挙により、ついに廃刊するに至れり」<sup>(20)</sup>とある。

これらの新聞発行人は3人とも、検挙された後に特高警察の激しい拷問による取り調べを受け、金文準は前述したように、拷問による身体の衰弱により死亡したが『朝鮮新聞』の発行人である金雲朱も治安維持法違反容疑の取り調べ中、拷問で病状が悪化して保釈されたが、病状は回復しないまま死亡した。<sup>(21)</sup>『東京朝鮮新報』の発行人金浩永は、取り調べ後、処分保留のまま釈放されている。

この時代、朝鮮語で新聞を発行し、さらに民族意識を保持し、民族の独立への道を残そうとした在日の先駆者たちは、その熱烈な民族主義のゆえに日本帝国主義との戦いで、壮烈な戦死を遂げたといえる。またその覚悟なしにはこのような論陣を張ることができなかったであろう。

(17) 高峻石『在日朝鮮人革命運動史』柘植書房、1985年8月

(18) 内務省警保局「昭和10年 社会運動の状況」

(19) 内務省警保局「昭和11年 社会運動の状況」

(20) 内務省警保局「昭和12年 社会運動の状況」

(21) 朴慶植『8・15解放前在日朝鮮人運動史』三一書房、1979年3月